

を完成するまでになったが、石田三成の家康に対する反旗挙兵となり、上杉築城のうわさを聞いて、既に家康は会津攻撃に向っていたが、江戸よりやや北にきた、小山で、進んで会津を撃つたらよいか、引きかえして、石田と戦うべきかを議した、所謂日本歴史を変えるほどの小山大評定があって、引返しに決断、関が原の合戦になった。

上杉氏は翌六年（一六〇一）出羽米沢三〇万石に削封されて移り、再び蒲生秀行が宇都宮より来封した。

秀行は関が原の戦後であるだけに内政に意をそそぎ、各部落までの下部組織を、政所・小政所といっていたのを大割元とし、郷頭をおき、その下の各部落の世襲の肝煎を小割元という名称に改めた。

旧鶴沼川が現在の太田川に流路を変えてからの旧河跡の河原・湿地が、北会津村の西部に広く横たわっていたので、そこに開墾、新田をつくり始めた。この大規模に具体化したのは元和九年（一六二三）頃からであるが、俗に十二新田と呼ばれる開発が、この頃からの開発系統をひいている。そのため寛永十三年（一六三六）には田奉行などもおこようになっていた。

もう一つ顕著なことは、上杉景勝が文禄四年（一五九八）に「金一分判」を使いはじめているのでもわかるがこの頃まで館に寄った豪族に対して、村人は、いくらか、農奴的な関係が残っていたのではないかと思われる。新田開拓がすすみ、融通経済が発達してくるにつれて、中世的農民の性格から解放されて、自主的本百姓に移ってきたのも、この頃であろうと思われる。

軽井沢銀山は元和二年（一六一五）に発見され、一時中だるみしたが、永禄八年（一五六五）頃から再興してき、下荒井が宿場になったのもこの頃で、道路の中央に堀を通じ、その両側を人馬が通った。

蒲生秀行は慶長十七年（一六一二）五月逝去、その子忠郷が継いだ若くて亡くなり、寛永四年（一六二七）